

伊豆の豊かな海を守る海藻移殖研究

(予算区分 研究費 研究期間 2023～2025年度)

担当：水産・海洋技術研究所 伊豆分場 角田充弘

【研究の背景とねらい】

- 伊豆半島沿岸では、黒潮大蛇行によって磯焼けが発生することが知られています。2017年8月から発生している黒潮大蛇行は、2024年3月時点でも継続し、史上最長となっています。この影響により、伊豆半島沿岸の磯焼けは継続しており、藻場の更なる衰退がみられています。
- そこで、本研究では黒潮大蛇行が更に長期化した場合に備え、海藻着生状況調査を継続するとともに、伊豆の豊かな海を支える基盤となる海藻の移殖研究を行います。

【これまでに得られた成果】

- 伊豆半島沿岸7地区において、潜水又は聞き取りで調査を行い、海藻の着生状況を確認したところ、全地区で磯焼けが継続しており藻場の衰退が見られました。その中で一部漁港内でアントクメやカジメ等の大型海藻が着生する箇所があることを確認しました。
- 稲取漁港のアントクメをモニタリングしたところ、夏季（水温27℃程度）でも生残り、1月から11月まで着生していることを確認しました。
- メガイアワビの稚貝に対して、カジメ、テングサ、ノコギリモク、アントクメをそれぞれ与えて成長を比較した結果、アントクメを与えた場合が最も稚貝の殻長が大きく成長することが明らかになりました（図1）。この結果からアントクメを移植対象海藻に決定しました。
- 白浜地区漁港外3地点と漁港内1地点、稲取地区漁港内1地点で海藻の生育に重要な硝酸態窒素濃度を測定した結果、漁港内が漁港外と比べて濃度が高い傾向にあり（図2）、海藻の生育に適していると考えられました。この結果から海藻移植場所を河津町菖蒲沢の漁港内に決定しました。

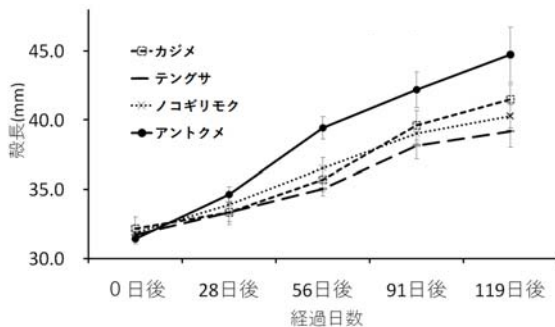


図1 メガイアワビ稚貝の成長推移

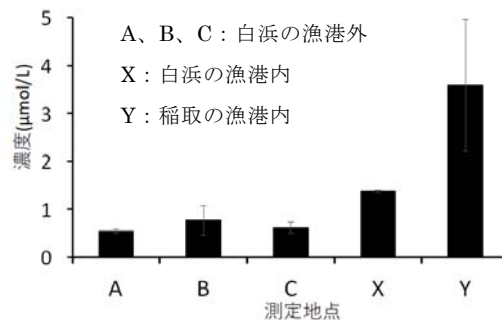


図2 地点間の硝酸態窒素濃度の比較

【期待される効果】

- 今後、アントクメの移殖技術を基にした藻場造成を行います。核藻場周辺の藻場回復とアワビの稚貝の放流場所として活用されることが期待されます。

【今後の計画】

- アントクメの生長条件を明らかにし、水槽内での種苗生産技術を開発します。
- 河津町菖蒲沢の漁港内にアントクメ種苗を移植し、その生長をモニタリングします。移植海域で食害対策を施すことにより、母藻（成熟）まで生育させることを目指します。

(作成 2024年4月)